受けたものもあって、火災にあった形跡がうかがえる。

以上のように、遺構として明確なものを認めなかったので、京都市文化財保護課とも協議のうえ、礫群の一部の石を必要最少限度はずして残りはそのままにし、ほぼ当初の計画にあわせて、工事に着手することとした。

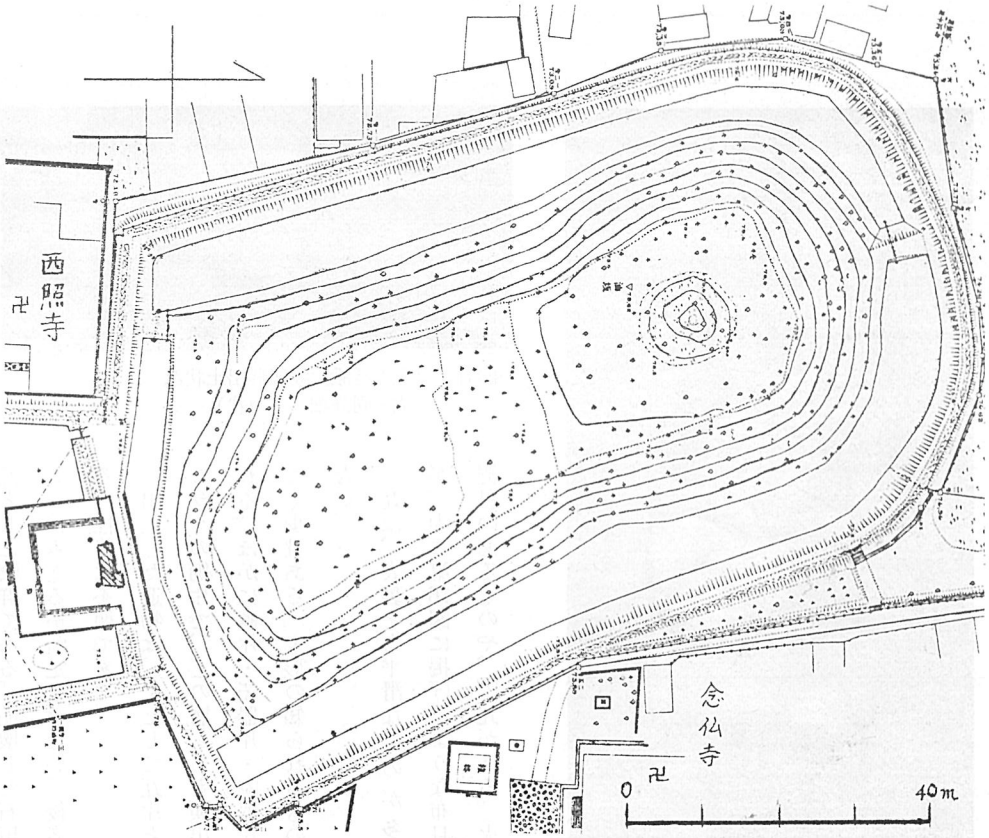
（笠野　毅）

五　開化天皇陵の鳥居建替工事の立会調査

開化天皇陵御拝所の鳥居建替のため、昭和五十年十一月十日鳥居の東西の柱の周囲を、各一・八メートル四方で、深さ一・七メートルの設計で掘削した。掘削中に東の柱穴から、深さ六〇～九〇センチの間で、小量の火葬骨と、蔵骨器と見られる黒色と灰色の瓦器の破片を立会職員が検出した。又深さ一・二メートル附近で、木棺と思われる木箱の一部が露出したので、工事を中止させ、翌十一日から二十一日まで調査を実施した。

調査は東柱穴を東へ約一・五メートル、西へ西柱穴まで拡張して発掘し、木棺及び蔵骨器の存在状況を調査した（第18図・第20図）。

柱穴の部分は、文久の修陵以来数回の鳥居建替により攪乱された土相で、粘性土に砂礫陶磁片等を交え、地下約一・三メートルの処に旧鳥居の基礎石がある。柱穴周辺部の状況から見る

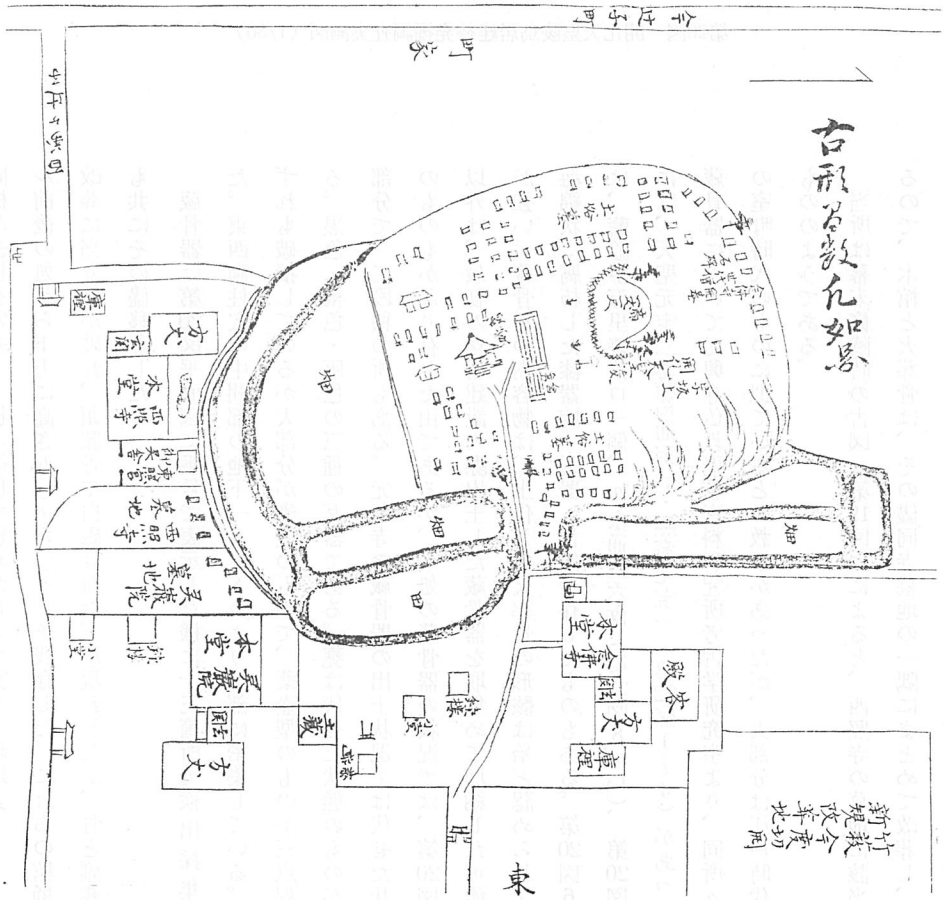


第18図　開化天皇陵鳥居建替工事発掘位置図（1/1000）

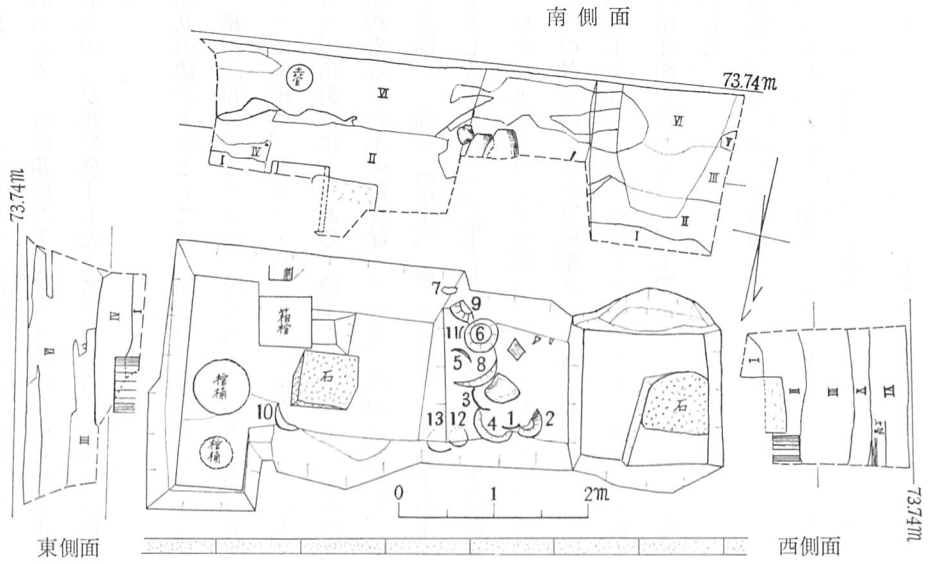
と、地下五〇～六〇センチの間は文久の修陵時の盛土と認められる。特に箱棺の上方部では芝草の枯死面が認められるので草地に盛土したと考えられる（第20図南側面図）。

原状の儘のものとしては、箱棺一、棺桶二が認められた。箱棺は間口五五センチ、奥行六〇センチ、高さ七四センチの坐棺で、厚さ一・八センチの檜板を合欠にして組合せ、角釘留にしてある。地下水に浸っていた為か変色腐朽もなく白木の儘を保っている。西面に安置し、棺の西側面に「前」の墨書、棺蓋表面に「元禄十六年」「癸未七月十五日」「享年十七而終」の三行の墨書がある。棺の外側約六センチの間は河砂利と粘性土が詰まり、その外側の一部に墓壙掘込の痕跡が認められる。棺上の埋土は五〇～六〇センチで、中央部が隆起し上部に草の枯死面が存するので、土饅頭になっていたことが察せられる。

棺桶は径六〇センチ前後と径三〇センチ前後の円形もの二種が検出された。幅九センチ前後厚さ一センチ程の杉板をたて並べ、竹たがを掛けたものであるが、竹たがは切れていた。上部はいずれも腐朽していたが、大型の棺には、蓋が残存し、棺内に落込んでいた。蓋は棺体と



第19図　開化天皇陵古図



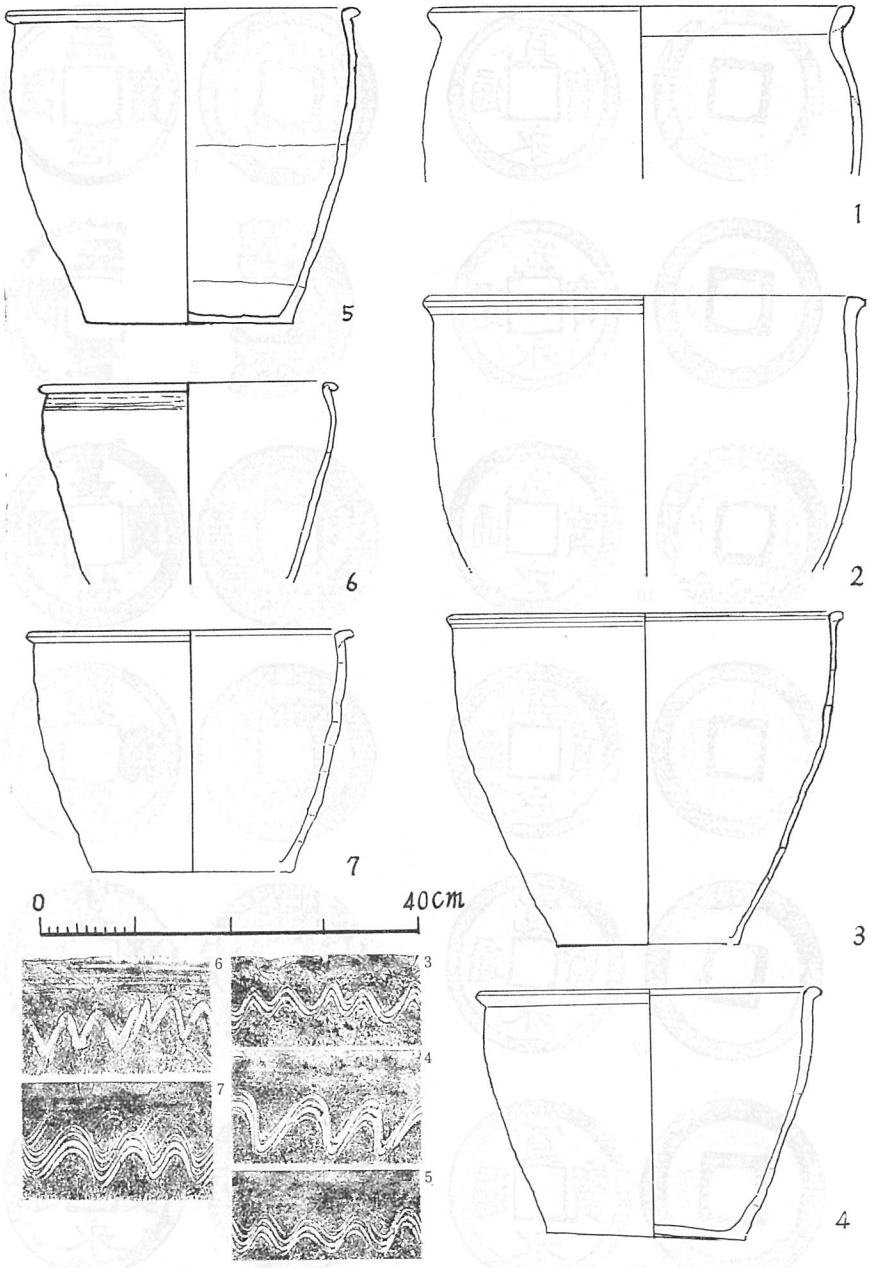
7・12・13 の蔵骨器は薬壺形、他は甕形。

第20図　開化天皇陵鳥居建替発掘調査実測図（1/80）

同様な細板を寄せ、二板の細板で留めたものである。現地表下一メートル前後の処から下方に高さ五〇～六〇センチ残存した。これらの棺桶は改葬に当り棺が破れ、頭骸骨や白磁紅皿などが現われたが、骨と副葬品も共にその儘移葬した。

蔵骨器は第20図平面図に番号で表示した様に十三箇所で検出採集した。東西両柱穴の中間部の地下一メートルより上部に密集している。いずれも破損しているが大部分が甕型のもので、薬壺型のものが三点程交る。黒色・褐色・灰色の三種の瓦器である。甕は伏せた状態のものが大部分で、二段積の所もある。元興寺の蔵骨器の出土状況では伏せた状態のものもかなり存した由であるが、当処の蔵骨器の状況では、第20図10以外は、最初の鳥居建設の際出土した蔵骨器を取集めて埋納した可能性が強い。蔵骨器の内容物は、土化して火葬骨の形骸は殆ど認められず、海綿状に腐朽した漆器椀・磁器・古銭の存したものもある。第20図6には、藍絵伊万里焼猪口一個、寛永通宝六枚（第22図8～13）、第20図10には、天聖元宝二・嘉祐通宝一・熙寧元宝一（第22図1～4）があった。蔵骨器について元興寺仏教民族資料研究所考古学研究室より、同所々蔵の室町時代のものに似ているとの教示があったが、大部分は江戸時代のもののようである。

当所は幕末修陵時の古図（第19図）によると、西照寺の墓地に該当するので、木棺と火葬骨は、その儘同寺墓地の一隅にまとめて改葬し、蔵骨器破片は奈良県文化財保存課と相談して採集保存することにし、鳥居

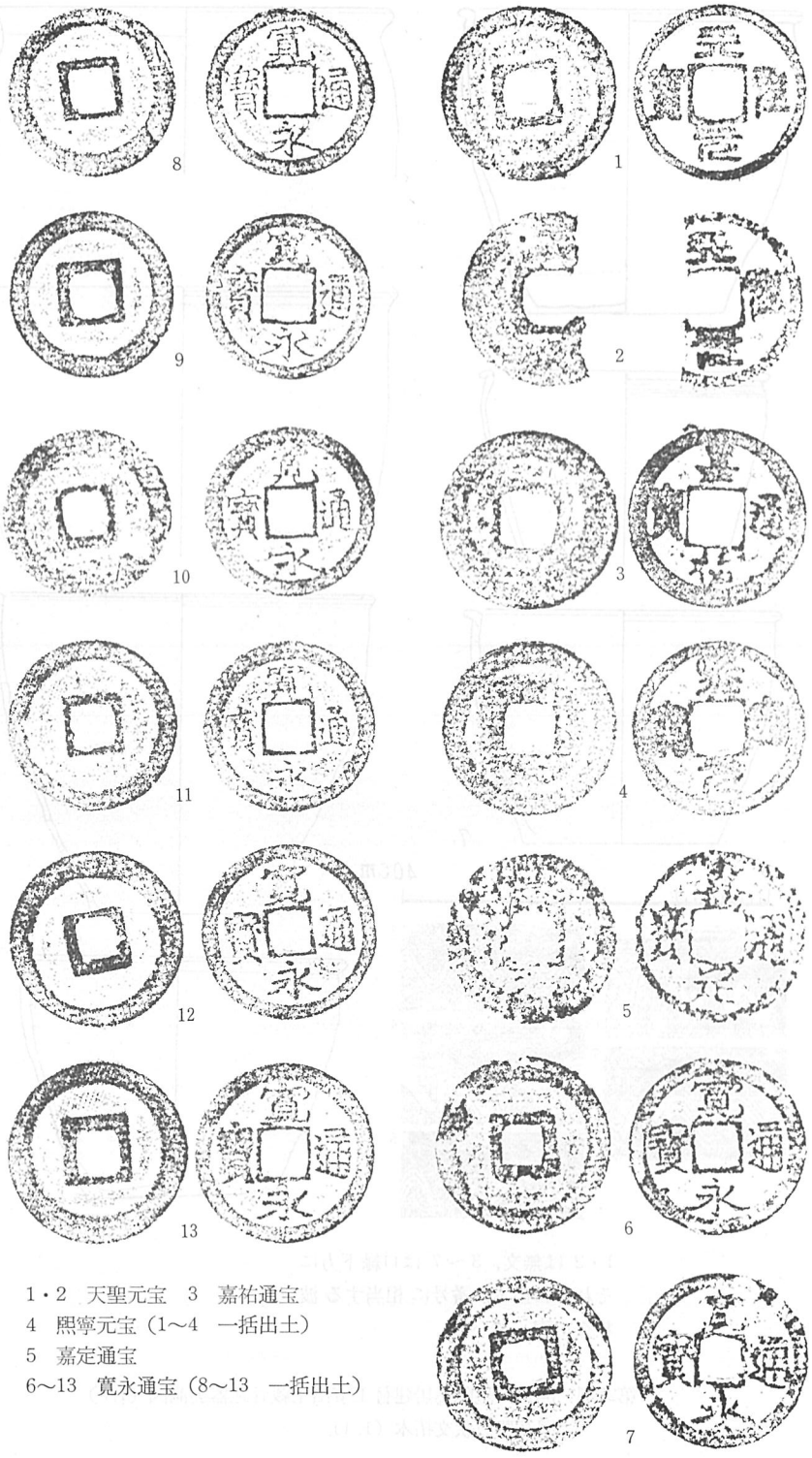


1・2 は無文，3～7 は口縁下方に
それぞれ拓本の番号に 相当する 波
状文が廻っている。

第21図　開化天皇陵鳥居建替工事出土蔵骨瓦器実測図（1/8）
同瓦器波状文拓本（1/4）

を建設した。本調査の採集出土品は、瓦器・土師器・陶磁器・瓦・南北宋銭・寛永銭など二九一点で、瓦器の蔵骨器破片が過半数を占める。復原した蔵骨器の一部の実測図（第21図）と、古銭全部の拓本（第22図）を掲示した。

（石田茂輔）



1・2　天聖元宝　3　嘉祐通宝
4　熙寧元宝（1～4　一括出土）
5　嘉定通宝
6～13　寛永通宝（8～13　一括出土）

第22図　開化天皇陵鳥居建替工事出土古銭拓本（実大）